

修得方法に放任さるべきではなく、各種の方法がとられ、利用する母親達が自分の生活環境の中から可能な方法を選んで利用する以外に道はないと思われる。②母親は多忙で家を空けられぬ者が多いから、空ける方法を、開催者側と家庭の両方が考える事。③社会学級や母親教室の開催方法としては ①講師のお話と質問、②参観・観察、③映画・スライド、④講師のお話のみ、の順となっている。これは年令別、学歴別に於て共に同一結果となっているが、但し、学歴別では中等教育以上の者は、ⅡとⅣに多くの希望があり、小卒、高等小卒の者はⅠとⅢに希望が多い点は注目すべきで、低い学歴者は全国的に多い事を考え、又昨年愛知県社会教育課の調査で青年学級の開催方法とし、映画方式が第一位の効果を挙げている事を考え合せて、今後より多くの保育映画が製られ、映画方式を中心とする啓蒙が盛になる事が希ましい様に思うのである。

幼児の偏食に関する総合的研究

国立精神衛生研究所 玉井 収介
東京家政大学 副 田 澄子
東京家政大学 鈴木 典子

I 研究の目的

この研究は、幼児の偏食に関して、心理的身体的両面から総合的

に研究しようとしたものである。従来この種の研究が、ややもすれば、小児医学または心理学それぞれの領域から別々に研究されてきた傾向があるのにかんがみ、われわれは、心理学(国立精神衛生研究所、玉井収介)、小児医学(東京医科大学、山県信弘)、精神医学(東京医科大学、加藤正明)の三者の緊密な協同によって研究をすすめた。

われわれは、この研究において偏食児を次の如く定義した。

i ある食品を一定度以上嫌い、または好むこと、(絶対に食べない、または、それがあれば、他のものは一切たべない)

ii ある期間、少くも一年以上つづくこと。

iii 拒食、異食、大食、少食などは除く、

iv 以上の条件に該当しても幼児が通常たべないものは除く、

II 研究の方法と対象

研究は次の各段階にわかれる。

i 第一回基礎調査、対象となる偏食児及び対照群となる正常児の撰抜、および分布、食品内容、家族の偏食その他の調査を目的とする。

ii 第二回調査

第一回調査によりえらんだ偏食児群と対照群に対し、幼少時からのしつけ方に関する調査と、三日間の献立表を記入してもらったの栄養調査を行った。

iii 小児科学的検査

つづいて、両群のうちから、それぞれ若干名をえらんで、小児科学的諸検査を行った。その内容は、身体計測、体力測定、体質、罹

病傾向、検便、血液検査、血糖量、副腎、機能、自津神経系機能等である。

iv 心理学的検査

同じく、両群からえらんで社会的成熟度尺度、C.A.T.を行つ、なお、各国で実施した知能検査の結果も参考にした。

v 面接

このうち、偏食児群の中から約四〇例について本人及び母親に少くとも一回以上の面接を行つて詳細な資料を得た。

vi 治療

最後に、極端な数例について可能なかぎり心身両面からする治療を行う予定である。

三〇年三月末現在、Vの段階まで完了している。

研究の対象にしたのは、東京都内八カ所の幼稚園、保育所の四六才児約一〇〇〇名でありこの中から偏食児二八〇名、対照児一二〇名を得た。研究の時期は二九年四月より三〇年三月に至る間である。

III 結果

以上、種々の方法によりえられた資料を総合して、いいうる結果を簡条書きにすると次のようになる。

i 偏食の分布、頻度、内容、

○偏食児は二四～五%の割合で出現し、年令、性別、親の年令、学歴住宅地別などには関係がない。

○嫌われる食品では、野菜が約半分をしめ、魚、肉の順になる。

野菜では、ネギ、ニンジンが断然多く、魚、肉では、これほどめだ

った傾向のあるものはない。

ii 家庭関係

○両親または家族に偏食のあるものが多いこと。

○Over protect 世話のやきすぎ、等の傾向のみられるものが多いこと。

○出生順位とはとくに関係は統計的にはみられない。

○偏食ということをも身体は栄養の点にのみ関係つけている親が多いこと。

iii 心身的特点

○やせて背が高く、体力にも劣ること。

○罹病傾向高く、貧血を示すものが多い。

○栄養摂取量が少い。

○蛔虫保存率には差はない。

○性格的には内気、消極的、神経質なものが多い。

○各種の神経質は習癖をもつたものが非常に多い。

○社会は成熟度も全面的に劣る。とくに、自律性に乏しく、食事の習慣のみはあまり劣らない。

以下略

以上の如く、偏食という問題は決して、それだけで独立して考えられるべき問題ではなく、それ自体が一つの神経質に習癖であり、強度のものは、疾病への準備状態ともいえるであろう。